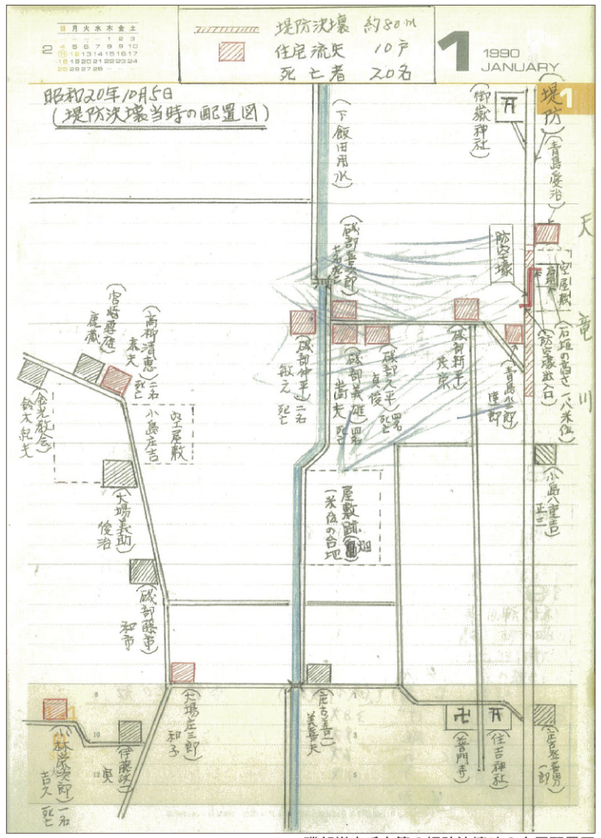
とです。当時、金折には昔の洪水はん濫の名残として、砂利を1ヶ所に集めて山にし、松の木を植えた松山（まつやま）が各所にありました。

悲しみの対面

その後も毎日舟で行方不明の家族を探しました。最初に遺体が見つかったのは、新家の善次郎というじいさんで、石原町の県道150線南のさつま芋畑の中で、昔の綿の糸巻き車をつかんでいました。続いて弟の忠雄が石原町の芋畑で見つかり、水を飲んで身体がぱんぱんに膨らんだ状態でした。妹のきくのは神出町の吉田医院、かつては静岡銀行芳川支店があり、今では三島に移転し住宅地になっていますが、そのすぐ東の芋畑で発見されました。こちらはきれいで、そのままの姿でした。その後には、分家の祖母のきのえが見つかり、金折町にあります護国神社の北側で水面に浮いていました。私の母親は毘沙門天の北側で、洪水の最初の本流となったところで、水田に稲とともに砂に埋まっており、片手だけ水面に出して流れで手がぶらぶらとゆれていました。その様子は、まるで助けを求めているようでした。母親は一番下の妹春子を半纏にくるみ、最後まで離すことなくしっかりと背負っていた姿が今でも脳裏に残っています。

母親は東側の家の磯部久平さん後をついてきて、家の西側の蔵までは一緒だったということですが、その蔵が流れるときに、久平さんは近くにあった松の枝につかまり助かりましたが、母親は子供を背負っており、半纏が水で重くなっていたこともあって、結局、溺れてしまったのですが、最後まで子供を離すことはありませんでした。母親は当時38歳で、私は15歳でしたが、母親と妹の身体は無くなってしまいましたが、ずっと私の心の中で生きています。北側の新屋では磯部喜次郎さんを含め8人家族でしたが、親父さんは勤めに出ていましたが、家にいた7人全員が亡くなりました。7人のうちじいさんとばあさんは私たちが舟で探し出したのですが、喜次郎さんの妻と4人の子供たちの遺体は最後まで発見することができませんでした。おそらく、芳川の堤防が天竜の流れで切れており、芳川に流れそのまま海へ出てしまったのか、あるいは深く掘れた土の中に沈んでそのまま埋まってしまったのかもしれません。当時の状況は以上でございます。ご静聴ありがとうございました。

原典：わが町文化誌「水と光と緑のデルタ」
浜松市立南陽公民館編



磯部嵩夫氏自筆の堤防決壊時の家屋配置図

地域で助け合い、救われた命

浜松市南区下飯田町　青島 達郎

証言伝承会で語る青島達郎氏

古きよき天竜川

磯部嵩夫さんは3つ違いの大先輩で、子供の頃は怖いお兄さんでした。当時は遊ぶといえば戦争ごっこやチャンバラ、あるいは馬乗り、陣取りなどが主な遊びでした。天竜川との関係では、私の4代前から天竜川の水を利用した精米業をしておりました。ですから家に舟が常にありました。遊ぶときには嵩夫さんから、「舟をもってこよう」とか、あるいは「泳ぎを教えてあげるから、今日は、川へ飛び込むぞ」というように言われ、当時ほとんどの子供たちは小学校2年、3年までには天竜川を泳いで横切り、対岸に着くことができました。

そんな、天竜川でしたが、もし10月5日の水害がなかったら、私共にとっては最高の遊び場でありました。魚釣りもできた本当に豊かな天竜川でした。

私の家は、本家で店をやったり米つきをやったりといろいろと商売をしていました。私が小学校3年の時に商売ができなくなって、堤防の防空壕から南に150メートル行った所に分家をしました。その時に堤防が（防空壕として）掘られたわけです。今から思い出しますと、磯部さんが話された状況がまぶたに浮かんできます。私の家から坂を下りていきますと左側の田んぼの中に大きな池ができていました。それはB29が落とした爆弾の跡でした。

そこからやや西側に進みますと、先程お話にありました磯部茂栄さんのお宅があり、大きな屋敷で立派な石蔵がありました。その屋敷には大きな庭があったものですから、遊ぶには好都合な場所でございました。その磯部茂栄さんのお宅の向かい側にはみかん畑がありました。みかん畑には夏みかんがたくさんなっていました。もう少し進みますとすぐ西側に第2の小屋があり、そこには大きな松の木が4、5本植わって繁っていました。更に進みますと磯部嵩夫さんの新家があって、細葉囲い伝いが磯部嵩夫さんのお宅へ近道となり、そこを通ってしょっちゅう遊びに行きました。磯部嵩夫さんのお宅も庭が広かったものですから、そこでは陣取りをしたりいろいろなことをして遊びました。

夏になるとのどが渇くものですから、井戸水をいろいろ飲ましていただいてのどを潤しましたが、当時は掘り抜き井戸で、ふつふつと水が湧き出ていまして、夏でも本当に冷たい水をずいぶんごちそうになった記憶が今でも蘇ってきます。そして、先程のお話にありました様々な方々の名前が、今でも私はこの脳裏に鮮明に浮かんできます。惜しくも亡くなった友だちや、よくいたずらをして追われた磯部さんのおじいさんやその他の皆さんの顔が本当に、今の3Dの絵のように浮かんできます。そのくらい天竜川と近隣の皆さまのお世話になった子供時分の思い出であります。

昭和20年10月5日

10月5日の約1週間から10日前、9月の末から長雨がしとしとと降り続いていました。それが増水の原因だったと思いますが、その当日は堤防の上から手が洗えるくらい増水し、そのうちに堤防を水が越えるのではないかというような状況でした。わたしの家の親父が「畳を持ってこい」というので、2畳ほど抱えて持っていき、その防空壕の出入り口のところへあてはめようとしたのですが、まったく役に立たず、「もう駄目だ、逃げた方がいいぞ」という親父のかけ声で、私たち家族は早々に家から飛び出して、堤防の下手へ逃げました。事実、1週間位前から